

ひたちなか 埋文だより 49



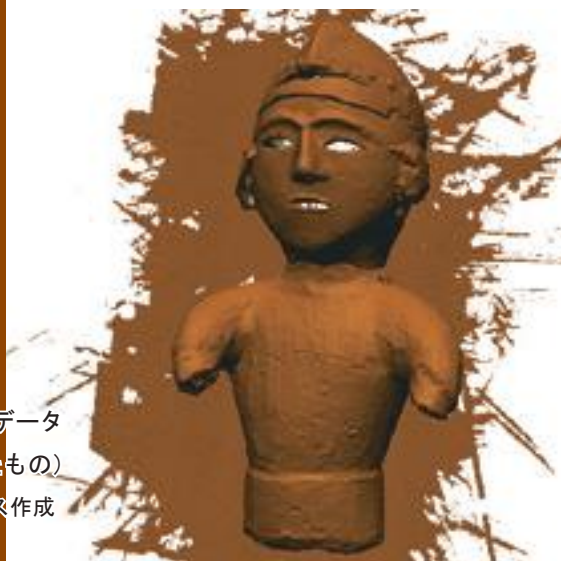
三反田蜆塚貝塚の土製耳飾り みたんだしいづか 三反田蜆塚貝塚から出土した土製の耳飾りは、施文された部位が円盤状に残るだけですが、もとは糸巻形、あるいは鼓形と例えられる形態であったと推定されます。現在のピアスのようにじだ耳朶を穿孔し、徐々に孔を大きくして、直径が3cmを超えるものも装着できたようです。文様は、中心に小さな楕円形、その外側を弧線が囲みます。このような形態と文様の土製耳飾りは、福島県いわき市のおおはた大畑貝塚を標識として「大畑系列」(上野 1995)*と呼ばれています。
(2018.8.24 博物館実習「女子大生と装身具」第8弾)

CONTENTS	田彦古墳群出土人物埴輪のデジタル三次元計測 (伝田郁夫)	
	「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」 第21回 史跡整備の基本理念 (川崎純徳)	
	資料紹介 殿塚古墳の線刻 (稲田健一・梅田由子・三井 猛)	
	土器からわかること —カンボジアで土器を作る人たちの暮らし— (黒澤 浩)	
	横穴墓を歩く② 雷神山横穴墓群・岩欠横穴墓群(相田美樹男)	1ケース・ミュージアム 46 底のそこ
	1ケース・ミュージアム 45 磯崎東古墳群 2	ひたちなか市の遺跡②改訂版 勝田一中学区編①
	遺跡めぐり 栃木県しもつけ古墳群探訪	歴史の小窓② 穂摘みの達人 ほか

*上野修一 1995 「大畑系列」土製耳飾小考『みちのく発掘』菅原文也先生還暦記念論集刊行会

デジタル三次元計測

伝田 郁夫



田彦古墳群から出土した人物埴輪の三次元計測データ
(三次元画像を斜め横から見たもの)

※ Geomagic Control を使用して早稲田大学文学部考古学コース作成

はじめに

二〇一六（平成二八）年度に、ひたちなか市田彦古墳群から出土した人物埴輪二点について、デジタル三次元計測を実施しました（今城ほか二〇一八）。

ここでは、計測の概要と成果、派生する問題についてお話しします。

一 田彦古墳群の概要

ひたちなか市田彦に所在する田彦古墳群については、すでに前号（『埋文だより』四八）でも紹介されていますが、那珂川支流の早戸川をのぞむ標高約三二mの台地上に立地し、四〇〇m×三〇〇m程度の範囲内に、前方後円墳一基、円墳二一基が存在していたとされています（川崎ほか編一九七五）。しかし、宅地造成や道路敷設などの開発行為によって数を減らし、一九七九

（昭和五四）年の時点では、現存古墳は円墳一基のみと報告されています（鴨志田一九七九）。その後の分布調査によって、地ぶくれ状のものも含めて円墳一〇基が確認されています（住谷一九八二）が、宅地化の進行により一九九九（平成一一）年にはわずかに二基が残存するのみとなり（鴨志田ほか一九九九）、二〇一四（平成二六）年の調査でも、古墳に伴うと考えられる遺構や遺物は発見されていません（佐々木編二〇一五）。古墳群の実態は、このように不明な点が多いものの、中小規模の前方後円墳を中心とした

二〇一三〇基の円墳からなる古墳群を形成していたと考えられます。

田彦古墳群では、かつて茨城県立那珂湊第一高校（現在の那珂湊高校）史学会が発掘調査を実施しており、小型の前方後円墳から粘土床の埋葬施設が発見されたほか、埴輪列が検出された古墳もあつたとされています。この調査で出土したと考えられる埴輪が、本稿で紹介する人物埴輪の器台（図一―二）で、一九九八（平成一〇）年にひたちなか市埋蔵文化財調査センターへ寄託されました（ひたちなか市埋蔵文化財調査センター一九九九）。

また、二〇〇四（平成一六）年には、個人所有の人物埴輪の上半身（図一―一）が寄託されています（ひたちなか市埋蔵文化財調査センター二〇〇四）。複数の文献（住谷一九八二、鴨志田ほか一九九九）で、衝角付冑を被った武人像が那珂湊一高の発掘時に前方後円墳から出土したとされていて、図一―一がそれである可能性は高いと思われる。図一―二については、すでに別稿（鴨志田ほか一九九九）で実測図が公開されていますが、今回、新たに三次元計測を実施しました。

二 デジタル三次元計測の方法

今回のデジタル三次元計測にあたっては、早稲田大学文学部考古学コースが所有するカナダ・クレアフォーム社製のハンディタイプの

たびこ 田彦古墳群出土人物埴輪のデジタル

遺物の実測で、形象埴輪を実測することは非常に難しく、高い技術力と実測の経験値が必要です。形象埴輪の完形品一個体の実測に数日間を費やすこともあり、資料化の壁の高い遺物のひとつであると言えます。

こうした形象埴輪の資料化には、デジタル三次元計測は極めて有効な手段です。

今回は、市内田彦古墳群から出土した人物埴輪について、デジタル三次元計測を行いました。

三次元スキャナー (EXAscanner) を使用しました。このスキャナーは、細かいところまでレーザーを照射できるため、形象埴輪など、複雑な形状の遺物を計測するのに適しています。また、ハンドタイプの場合、計測の際にスキャナー本体に自分の位置を認識させるため、特殊なシール (直径約1cmの弱粘質のターゲットシール) を遺物に貼り付ける必要がありますが、なるべく形象埴輪の特徴を観察するのに妨げない位置や石膏などの復原部分へ貼り付けるように心がけました。計測ソフトにはVXelementsを使用し、パソコンのモニターで確認しながら計測を行いました。

計測した三次元データは、ソフトを使用して計測の際に出たノイズを除去し、前後左右の正しい位置に整列させた後、株式会社ラングのPEAKITという画像処理を施しています (図一)。この処理を施すことで、計測した三次元データだけでは読み取りにくい、埴輪の表面に残る特徴 (刷毛目やナデ) をはっきりと表現することができるようになります。ここでは従来の実測図と同じように五面の展開図を作成しています。

三 田彦古墳群出土の人物埴輪

男子・武人 (上半身)

衝角付冑を被り、挂甲を身にまとった武人を表現しています (図一)。残存高は四一・九

cmを測ります。

額には横方向に粘土紐を貼り付けて厚みを持たせ、その上部に粘土塊で先端を突出させて、衝角付冑の底を表現しています。庇のやや上方に沈線一条を周回させ、その下に円形の粘土粒を貼り付けて、鉄板の鋳留を表現しています。冑の側面から背面にかけて、鋳が残存して、前面に向って丸みを帯びる形状をしています。鋳には縦方向の直線と横方向の半円形の沈線で小札 (鉄板) を表現し、上部に円形の粘土粒を貼り付けています。小札部分には紺色の彩色が認められます。

眉を「V」字状に粘土紐を貼り付けて表現し、そのまま鼻筋へと繋がっています。鼻の孔の表現はありません。目は下端が直線的に切り込まれています。口は目より小さく、細長く切り込まれ、端部は尖っています。粘土紐と円形の粘土粒によって首飾りが表現されていますが、あまり残りは良くありません。背中の上部に横方向の粘土紐を一条貼り付けて、その上に円形の粘土粒を貼り付けています。肩鎧などを表現した可能性もありますが、詳細は不明です。

両腕部の先端は欠損していますが、そこから「木芯中空」技法が確認できます。「木芯中空」技法とは、木の棒に粘土紐を巻き付けて腕部を製作し、最後にその棒を抜くことによって、腕の中に細長い中空部分 (空洞) ができることを言います。



図1 田彦古墳群出土人物埴輪のPEAKIT画像

胴部には、縦方向の直線と横方向の半円状の沈線を上下二段にわたって施して、挂甲の小札を表現しています。腰部には幅広の粘土紐を貼り付けていますが、裾部以下を欠損するため、その下の表現は不明です。

全体的に残り具合は悪いものの、口から下顎にかけて、挂甲や上腕部、腰紐などに紺色の彩色が確認できます。本資料は、次に紹介する武人像の器台と胎土・色調・焼成が比較的良く似ていますが、腰部の形態や直径が異なることから、別個体と考えられます。

男子・武人（器台）

武人像の器台です（図二二二）。残存高四〇・二cmを測ります。底部より五cm前後の低い位置に粘土紐（突帯）を貼り付けています。器台は円筒状にほぼ垂直に立ち上がっており、そのまま裾部へと繋がっています。外面は縦刷毛調整、内面は斜め方向のナデ調整が施されています。裾部を積み上げて端部を横ナデ調整した後、左右の直下に一对の円形の透孔を空けています。裾部は腰へ向ってすぼまり、幅広の粘土帯を貼付して正面に「逆V」字状の結び目を表現しています。左側面には角柱状の粘土塊を貼り付けて大刀を表現していますが、柄頭や鍔を欠損しており、全体的な形状や表現は分かりません。先端部分は粘土で厚みを持たせて、鞞尻を表現しています。裾部には縦方向の直線と横方向の

半円形の沈線で草摺を表現しています。円形の粘土粒を大刀や裾部の端にまばらに貼り付けています。腰部の上にも沈線が残っていることから、草摺と同様、挂甲を表現していると考えられます。

両者の埴輪は同一個体ではありませんが、同じ形態の武人を表現したものと考えられます。二本の脚部を表現せず、下半身を円筒状の器台で表現する、いわゆる「半身像」であると考えられます。

今回計測した人物埴輪二点は、同じような特徴を持つ埴輪が東海村・日立市・常陸太田市・常陸大宮市といった茨城県北部の久慈川流域に分布することから、かつて車崎正彦氏によって提唱された「久慈型」埴輪（車崎一九八〇）に該当します。田彦古墳群は那珂川左岸に位置するひたちなか市に所在することから、この「久慈型」埴輪の分布域の南限に当たると考えられます。

四 考古学におけるデジタル技術の活用

近年、科学技術や電子機器の急速な進歩に伴って、考古学の調査・研究においても、デジタル化が普及してきました。遺跡の発掘調査の現場でも、検出遺構や出土遺物の記録などに積極的に導入され始めています。遺構や遺物を詳細かつ正確に記録することによって、これまでの手書きの実測図では表現に限界があった遺構

の構築技術や遺物の製作技術がはつきりと観察できるようになったことは、大きな進歩と言えます。

今回、三次元計測を行った人物埴輪は、形象埴輪の中でも馬などの動物埴輪と並んで、複雑な形態と立体的な構造をしています。製作にあたっては、熟練した高度な技術が必要とすることが想像できます。また、埴輪は実物をデフォルメしてつくられるため、製作者個人（工人）のくせや、その人が所属する集団で共有されている埴輪製作の決まり事（人物埴輪の場合、頭・両手・両足などの身体的特徴、髪の毛・衣服・武器・武具・耳飾りや首飾りといった装飾品などをどのように表現するのかといったこと）に対して、最も特徴が現れやすいとされています（日高二〇一三など）。

埴輪も土器や石器などの遺物と同様、手書きで実測する場合は、方眼紙の上に正位置になるように置き、銅尺（物差し）を立てて測り込み、図化をします。しかし、埴輪は、原始・古代につくられた土器・土製品の中でも、最も大きな部類に入るため、いくら丁寧に正確さを期しても、1mを超えるような形象埴輪の大型品の実測となると、人間の手による計測では少なからず誤差が生じます。また、人物埴輪のように、形象埴輪は前後（正面・背面）・左右が決まっていることが多く、四面全てを矛盾なく計測することは非常に難しく、高い技術力と実測の経験

値が必要です。形象埴輪の完形品一個体の実測に数日間を費やすこともあり、資料化の壁の高い遺物のひとつであると言えます。ほかの遺物と比べて資料化が進まないのは、こうした大きさや形態など、形象埴輪独特の特性に起因すると考えられます。

こうした形象埴輪の資料化には、デジタル三次元計測は極めて有効な手段です。実測図は、実測者が遺物を観察した結果を一定のルールに基づいて図化（記号化）したのですが、埴輪の場合、実測者の引く線によって、人物や馬などの顔の表情が大きく変わることもあります。実測図を作成する際には、遺物を詳細に観察し、製作技術や表現方法をできるだけ丁寧に復原しなければなりません。三次元計測などのデジタル技術は、実測者の観察結果によるばらつきを可能な限り抑え、客観性を担保することに優れているといえます。

もちろん、考古学の世界では、遺物の観察は分析の基本であり、それはデジタルになっても変わりません。デジタル技術は、今後、考古学や文化財保護の分野で様々な活用されていくことになると思いますが、これまでの実測図に変わるものとして考えるよりは、新しい手法の一つとして、従来の方法と併用しながらデジタルの特性を活かした調査・研究方法を考えていくことが重要であると思います。

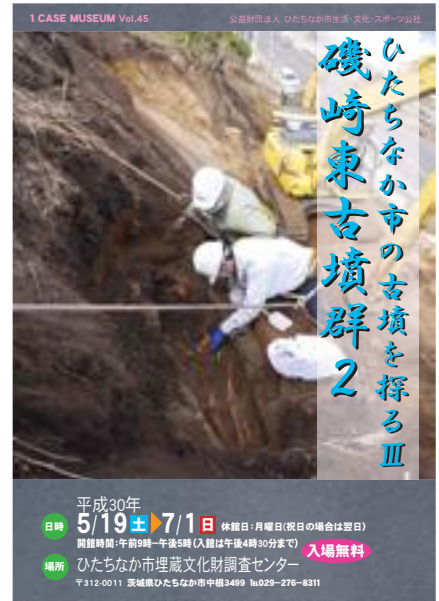
おわりに

今回実施したデジタル三次元計測は、通常の実測とは異なる方法ですが、人物埴輪のような大型品の形状の把握や微細な表現方法を検討する上で、非常に有効な方法です（城倉二〇一七・城倉編二〇一七・伝田ほか二〇一八）。博物館や美術館には、出土地の不明な埴輪が収蔵されていることがあります。その多くは盗掘や工事中の不時発見で出土したものが、骨董商を介して「美術品」として流通したものと思われまふ。「古拙美」とも呼ばれる古代の人々の素朴な造形技術には、確かに多くの人々が魅力を感じるものですが、遺跡の出土情報から離れてしまった考古資料に対して、正確な計測データを与えることなく研究の対象にすることは、なかなか難しいと言わざるを得ないのが現状です。茨城県内の古墳や窯跡から出土した埴輪には、実測図の公表など、資料化されていないものが少なからず存在します。

こうした遺物に対して、最新のデジタル技術を駆使して資料化をはかり、可能な限り考古学的な「価値」を付加していくことで、考古学研究の対象とすることが可能になると考えまふ。今後も作業を継続して進めていくことで、基礎資料の提示が不足している「久慈型」埴輪をはじめ、茨城県の埴輪研究の一助になればと考えています。

参考文献

- 今城未知・横山 真・千葉 史・伝田郁夫 二〇一八 「久慈型」人物埴輪の三次元計測調査報告」『埴輪研究会誌』第二二号、埴輪研究会
- 鴨志田篤二 一九七九 「田彦古墳群」『勝田市史』別編Ⅱ 考古資料編 勝田市
- 鴨志田篤二・白石真理 一九九九 「ひたちなか市田彦古墳群出土の人物埴輪について」『菟玖波』第三号、菟玖波倶楽部
- 川崎純徳・鴨志田篤二・住谷光男編 一九七五 「勝田市埋蔵文化財分布調査報告書」(『勝田市文化財調査報告』第一集 勝田市教育委員会 車崎正彦 一九八〇 「常陸久慈の首長と埴輪工人」『古代探叢』早稲田大学出版部
- 佐々木義則編 二〇一五 『平成二六年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会
- 城倉正祥 二〇一七 「デジタル技術でせまる人物埴輪―九十九里の古墳と出土遺物―」吉川弘文館
- 城倉正祥編 二〇一七 『殿塚・姫塚古墳の研究―人物埴輪の三次元計測調査報告書―』(『早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究』調査研究報告 第三冊) 六一書房
- 住谷光男 一九八二 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』勝田市教育委員会
- 委員 会
- 伝田郁夫・横山 真・千葉 史・ナワビ アハマッド矢麻 二〇一八 「富岡重憲コレクションの形象埴輪に関する基礎的研究」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第一九号、早稲田大学會津八一記念博物館
- 日高 慎 二〇一三 『東国古墳時代埴輪生産組織の研究』雄山閣
- ひたちなか市埋蔵文化財調査センター 一九九九 「ひたちなか埋蔵文化財調査報告書」第一〇号、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
- ひたちなか市埋蔵文化財調査センター 二〇〇四 「ひたちなか埋蔵文化財調査報告書」第二〇号、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター



「ひたちなか市の古墳を探る」第二回目は、前回に引き続き磯崎地区に所在する磯崎東古墳群を対象として、『埋文だより』46で紹介した二〇一一年から二〇一六年の調査成果を展示しました。調査成果の詳細については、『埋文だより』46に掲載していますので、ここではその後明らかとなった成果をご紹介します。

磯崎小学校敷地内古墳群

調査では、円墳一基と周溝を有さない横穴式石室四基を確認しました。そのうち、第1号石室の出土遺物を整理した結果、須恵器のフラスコ形長頸瓶の破片、水晶製の切子玉八点、滑石製玉一三点、ガラス製小玉二四三点が出土したことが判明しました。須恵器のフラスコ形長頸瓶は、その形状から七世紀前半のものであると推測しました。また、ガラス小玉については、顕微鏡で拡大して観察すると、小さなガラス粒の集合体であることがわかります。これは、ガ

ラス玉を砕いて、鑄型に入れて製作したものと考えられます。つまり、ガラス玉を再利用しているということですね。このようなガラス小玉は、古墳時代後期後半以降に多く製作されたと考えられています。

臨海部傾斜地に構築された石棺墓

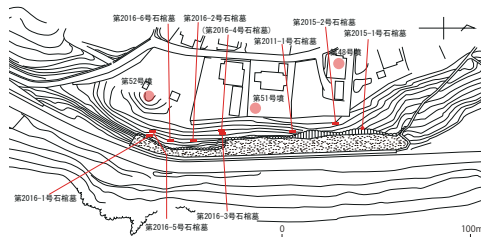
石棺墓は、海岸線に沿って南北に走る道路脇の傾斜地で九基を確認しています。

石棺墓の構造は、海岸の石を利用し、基本的には短軸方向に一つ、長軸方向に四つの石で石棺を構成しています。石棺墓はほぼ全てが南北方向に主軸をもち、確認された人骨の頭位も北に向けています。床面には石材はなく、厚さ2cmほどの海砂が敷かれていました。規模は長軸が1.7m、短軸が20〜40cm、高さが25cmのものが多く、長軸が1mという小型のものもあります。

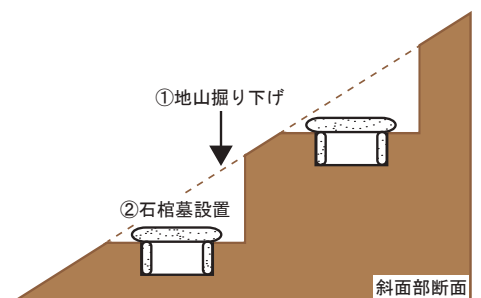
石棺墓が構築された場所は崖面の最上位から中位にかけて二段もしくは三段に配置され、その設置方法を推測すると、下図のように斜面部を



第1号石室出土ガラス小玉



石棺墓位置図



石棺墓の設置方法推定図

断面L字形状に掘り下げて平坦面を造り石棺を据えているものと思われます。また、石棺墓は埋め戻されない状態で蓋石が露出していたと考えられることから、海からの視点では石棺墓の蓋石が見えることとなります。

石棺墓の時期については、同じような石棺墓が確認されている日上市河原古墳群第四次第八号墓から、七世紀後半の遺物が伴う石棺墓が確認されていますので、七世紀の時期に構築された可能性があります。

これらの石棺墓は、とくに海が目の前に広がる立地から、被葬者の海への強いこだわりが感じられます。また、同じような石棺墓が神奈川県三浦半島や和歌山県紀伊半島で確認でき、同じように臨海部に位置していることなどから、海上ネットワークに関連する海洋民の墓とも考えられます。

(稲田健二)

* ガラス小玉については、東京都大田区立郷土博物館の斎藤あや氏にご指導いただきました。



土器の底面を観察すると、模様のような痕がみえることがあります。土器製作では土器を回転させる必要がありますが、これは、そのために使用した下敷きの痕だと考えられています。

何が使用されていたかは、時代や地域によって変わってきます。ひたちなか市周辺から出土する縄文土器にみられる圧痕は、圧倒的に網代痕で、縄文時代後期以降にほんの少し木葉痕があるだけです。しかし網代痕も、出土している土器の割合からすると少なく、ほとんどの底面には圧痕がありません。底面まで調整されて仕上げられているから圧痕がないという理由もありますが、縄文時代中期には器台きだいという専用の道具を使っていたのではないかともいわれています。器台は、ひたちなか市君ヶ台遺跡きみがだいでも出土しています。弥生時代は、網代と交代するように中期中葉以降に布目が登場します。後期後葉にはザラザラとした底面痕跡を持つものも出

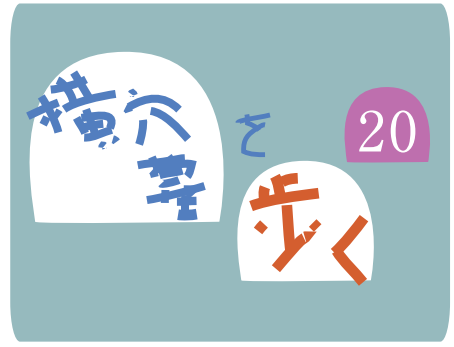
現し、これは砂痕と考えられています。打ち粉のように砂を使用して作業台への付着を防いだのでしょうか。縄文時代と違い、木葉痕は断続的にずっと使用されています。古墳時代以降、市内で確認されているのは木葉痕だけになります。ほとんどが甕かめや小型土器の底面です。杯に残る例が少ないのは、基本的に丸底に調整するからだと考えられます。丸底に調整できないような杯つきに木葉痕が残る例があります。奈良時代以降、土器製作がロクロになるため木葉痕があるのはほとんどが甕になります。

下敷き以外にも土器の底には痕が残っています。ひたちなか市松原遺跡から出土した古墳時代前期の小型手づくね土器には、杵と考えられる圧痕が底面に一粒ついています。

展示では、縄文時代から奈良時代までの土器の底部を紹介しました。「土器の底のそこにあったもの」が見えるように、底面を型としてシリコン製のレプリカを作成しました。土器底面とともに、従来の底面の記録・観察方法である拓本と比べられるようにしました。
(菊池順子)



トイレのリニューアル (2018.6.19 撮影)



茨城県常陸大宮市

らいじんやま

雷神山横穴墓群

いわかけ
岩欠横穴墓群

相田 美樹男

(日本考古学協会)

雷神山横穴墓群（常陸大宮市指定史跡）と岩欠横穴墓群はJR水郡線常陸大宮駅から見て北西方向へ約二〜三kmの常陸大宮市八田地区に所在しており、久慈川支流玉川東岸の凝灰岩からなる丘陵斜面に造られています。

二つの横穴墓群の共通点は、横穴墓が玉川に面する同一丘陵の西側斜面に配置されていること、丘陵の麓ではなく中腹の範囲に造られていること、比較的少数からなる集団墓で構成されていること、発掘調査がなされていないため内部構造や墓前域から羨道せんどうの構造が不明確な点が多いこと、未確認の横穴墓がまだ土砂に埋もれている可能性があること、などがあげられます。

次にそれぞれの横穴墓群についての特徴を見ていきます。雷神山横穴墓群は丘陵中腹域内の上位位置に一基、その下位置に四基が横一列に並んで配置されています。上位置の一基は埋葬施設である



雷神山横穴墓群全景と横穴墓

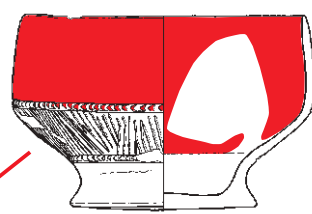
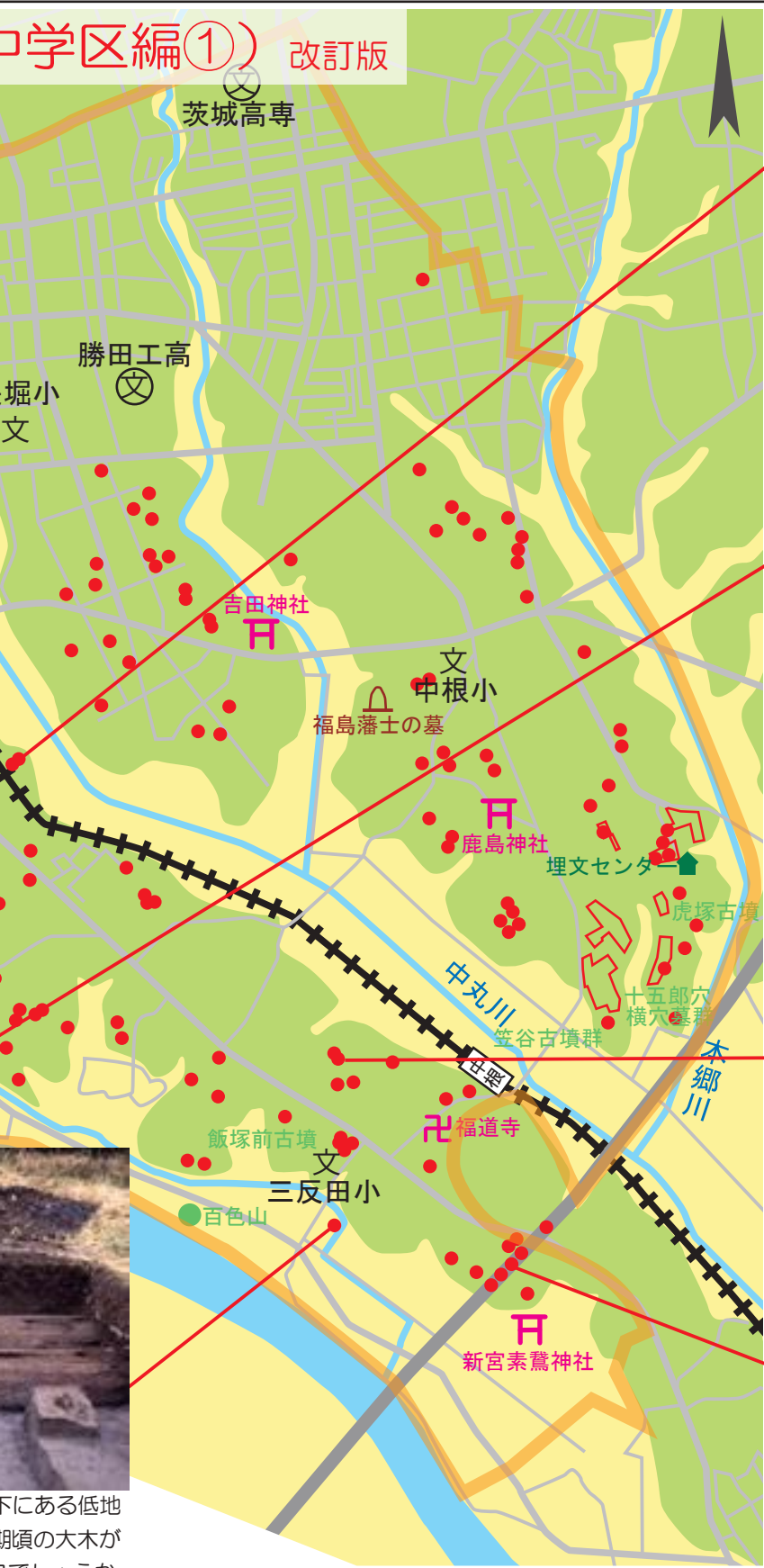
玄室げんしつの立面形が奥壁側のつぶれたドーム型をしており、円形の床面には壁面に沿った排水溝が確認できます。玄室の規模は高さ一・七二m、奥行き二・〇m、幅二・一九mを測り、雷神山横穴墓群内では最大となっています。その下に位置する四基の横穴墓は玄室の立面形が皆アーチ型となっています。左端の一基は玄室床面が奥壁に平行した浅い段差を有し棺座かんざを意識させたような構造となっています。残りの三基については玄室内に土砂が流入しているために詳しく観察できない状態にあります。

岩欠横穴墓群は雷神山横穴墓群から見て南東方向へ約一km離れた場所にあります。ここは西側から入り込んだ谷によって丘陵斜面が北側と南側に分断された形状をしています。北側の丘陵斜面はL字状をした地形となっており、横穴墓はそのL字状地形の西側と南側の中腹上位置に確認できます。西側には七基、谷に面した南側には六〜七基がほぼ横一列に配置されています。西側にある横穴墓はほとんどが土砂に埋もれていますが、一基のみは飾り縁を持った玄門と玄室内部が観察でき、玄室の立面形がカマボコに似た天井がややつぶれたアーチ型となっています。南側の横穴墓は崖面が崩れて羨道や玄門の形状が不明確な状態となっていますが、玄室の立面形がアーチ型のもの、アーチ型であり規模が小さいもの、寄棟造り家型のもの（北端）などがあります。さらに、奥壁に二つの凹みを持ち、左右の側壁には玄門より小さな凹みを持つ何らかの閉塞施設の跡を持つと思われるようなものもあります。

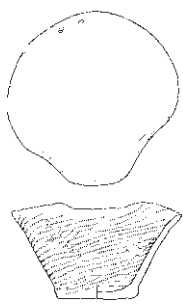
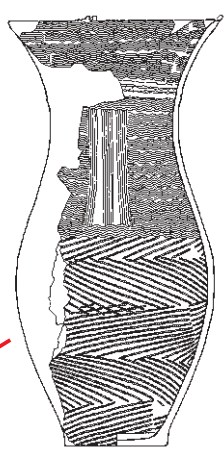
以上、玄室立面形に着目した場合、雷神山横穴墓群ではドーム型が、岩欠横穴墓群では家型が、それぞれの集団墓造営における背景の相違を表したものと考えられます。



岩欠横穴墓群南側全景と横穴墓



遠原貝塚には、小規模な地点貝塚がいくつも残されています。これは、住居跡から出土した縄文時代前期の浅鉢形土器です。赤色顔料で、内面にも文様が描かれています。



岡田遺跡には、弥生時代後期の集落跡が確認されています。これらは、那珂川流域に特徴的な「十王台式」と呼ばれる土器です。



三反田蜆塚貝塚から出土した縄文時代の土偶です。この遺跡からは、土偶の他にも動物の骨で作られた道具など貴重な遺物がたくさん出土しています。



三反田下高井遺跡で調査された古墳時代から平安時代の住居跡の写真です。長い間住居がつけられたため、いくつもの住居跡が重なっています。

下にある低地
湖沼の大木が
好まれます。

ひたちなか市の遺跡 2 (勝田一)

勝田一中学区には、現在、83の遺跡がみついています。この数は市内でもっとも多い数です。今回紹介する東石川小(南区)・勝倉小・三反田小学区は、中丸川と那珂川に挟まれた地域で、42の遺跡があります。この中には、縄文時代の三反田蜆塚貝塚や遠原貝塚、古墳時代の三反田下高井遺跡や大平古墳群、飯塚前古墳といった、有名な遺跡が存在しています。

遺跡の発掘調査は1950年代から行われており、2017年までに157回実施されています。この数も市内でもっとも多い数です。調査では、住居跡が404基みついています。遺跡から出土した遺物には、縄文時代の土偶や動物の骨でつくられたつり針、乳飲み児を抱く埴輪等貴重なものがたくさん出土しています。

2017年までに発掘調査された住居跡の数

勝倉地区：40基 三反田地区：364基
 合 計：404基

2017年までに発掘調査された遺跡 (地図上の●印)

勝倉地区：金上遺跡、金上埴遺跡、金上向山遺跡、勝倉城跡、勝倉富士山遺跡、勝倉若宮遺跡、勝倉古墳群、大平古墳群、大平A遺跡、大平B遺跡、大平C遺跡、地蔵根遺跡、殿塚古墳群、遠原貝塚、遠原遺跡、大房地遺跡、相対古墳群、相対遺跡、畠ノ原遺跡、平井遺跡
 三反田地区：三反田新堀遺跡、岡田遺跡、天王前遺跡、飯塚前遺跡、飯塚前古墳、新平埴遺跡、新平埴古墳、三反田遺跡、上河原遺跡、三反田蜆塚貝塚、三反田蜆塚遺跡、三反田古墳群、蜆塚西貝塚、内手遺跡、下高井遺跡



大平古墳群からは、乳飲み児を抱く埴輪が見つっています。この埴輪は全国でも非常に珍しいものです。



大平古墳群第1号墳は、全長約4.8mの前方後円墳です。埋葬施設は長さ約5mの横穴式石室で、石室内からは馬具や鉄鏃、玉類などが出土しました。



三反田下河原遺跡は、現在の水田の下に埋もれた遺跡です。調査では、古墳時代前期の2本見つっています。これは丸木舟



約 13000 年前

約 2300 年前

約 1700 年前

約 1300 年前

旧石器時代

縄文時代

弥生時代

古墳時代

奈良時代

郷土に歴史があるという事は、遺跡はどこにでもあるという事である。

「埋蔵文化財は地域の歴史文化を知るかけがえのない資料である」という観点に立てば、すべての市町村に、保存・活用すべき遺跡はある。人々が居住したところに、歴史や伝統が生まれ、それが誇りとなつて愛着ある郷土が生まれる。歴史のない市町村はないのである。誇りうる先人からの遺産を保存・整備する。古墳にしても城跡にしても、多くは日本史上の華々しい歴史を物語るものではない。しかし地域にとってはかけがえのないものである。その生かし方は様々である。

史跡整備の在り方は展示施設との一体的な整備が必要となる。整備にあたっては遺跡の性格によつて様々である。古墳については埴輪列を再現したり、歴史時代になると城館や建物を復元する平城京型の箱物整備も行われている。いわゆる屋外展示施設型の整備である。遺跡の整備は筆者の永遠のテーマである。そして出土品は遺跡から切り離されて博物館などの展示施設の陳列ケースに並べられる。その場合しばしばジオラマなどによる背景展示が入れられる。調査の過程で膨大な記録(映像を含めて)が撮られる、これらを展示に活用する必要がある。遺跡の調査風景や出土状況などを展示施設内に再現できないものであろうか。

いくつかの市町村で国指定史跡の整備が進められている。しかし整備の先にある活用に関し

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第21回 史跡整備の基本理念



公開講座「ひたちなか市の考古学」(2008.2.16 撮影)



川崎 純徳

ては確かな見通しが見えてこないが多くは観光開発を念頭に入れている。この点に関しては行政当局と委員会の論議が必要であり、少なくとも整備に関しては基本理念の共有が必要になる。単純に観光資源と言っても、整備イコール観光開発とはならないのである。史跡は遊園地ではないし遊戯施設でもない。しかし今日の行政からの要請をむげに否定するつもりもない。観光資源化のほかに街づくりの核としての整備・活用がある。住みよい町、誇りうる郷土は自然に恵まれ、豊かな歴史と伝統文化に彩られた郷土であるからである。また生涯学習の拠点としても重要である。更に今日の超高齢化社会を考えた時に、健康で長生きは大きな課題である。日ごろから健康に留意した生活。戸外での活動、仲間との触れ合いは喫緊の課題であろう。家に閉じこもる生活から史跡を通して自然に触れる生活は健康で長寿と言う現代的課題にも答えるであろう。それは医療費・介護費軽減に必ずやつながるはずである。

どのような活用を重点的に選択するかによつて整備は微妙に異なる。しかし、それが史跡であるという現実を忘れてはならない。整備目的の一つではなく、いくつかの今日的課題に答える必要がある。史跡整備はようやく始まったばかりの、今世紀の重要な課題である。残念ながらその夢を、この目で見ることはできそうにない。

栃木県しもつけ古墳群探訪

今回の遺跡めぐりは、栃木県小山市・下野市・壬生町に位置するしもつけ古墳群を見学しました。古墳群探訪は、二〇〇九年度の埼玉県埼玉古墳群、二〇一五年度の千葉県龍角寺古墳群に続き、三回目となります。

当古墳群は、国分寺地域・壬生地域・石橋薬師寺地域といったいくつかのブロックを形成しており、それぞれの地域の古墳は整備されており、たくさんさんの古墳を見学することができます。



摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳資料館での見学風景

今回の見学では、

四月に開館したばかりの摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳資料館や整備が進む琵琶塚古墳、しもつけ風土記の丘資料館を見学しました。また、直径八六mを誇る大型円墳の車塚古墳では石室を見学し、参加者から感嘆の声が聞かれました。

(稲田健二)



しもつけ風土記の丘資料館での見学風景



琵琶塚古墳の見学風景

歴史の小窓 その二

穂摘みの達人

雪がどっさり積もった今年の冬、市毛上坪遺跡の調査で、九世紀の住居跡から見慣れない遺物が出土しました。一部が欠けて

いましたが、両端に穴が開いた形から穂摘鎌と推定できます。

穂摘鎌は、稔り具合が一定ではないアワやキビの穂摘みに用いられたと考えられています。

慣れると片手で次々と摘めるため、便利な道具だったようです。



九世紀頃は、稲も穂首刈りでした。おそらく、市内からも多く出土している鎌を用いたので、藁として利用したことも、鎌が多く用いられた理由なのかもしれません。

九世紀以後、市内ではアワやキビの炭化種実の出土が目立ってきます。もしかすると当時、市毛のアワ・キビの畠では、穂摘鎌の達人の技を、感心しながら眺めていた人々がいたかもしれません。(佐々木義則)

参考文献 佐々木長生「一九八八「奥会津の穂摘み具」」山と民具、河野正訓

「二〇二二「鉄鎌の構造」」古代学研究所紀要「第一七号、松村恵司」一九九八「正倉の存在形態と機能」古代の稲倉と村落・郷里の支配」

土器からわかること

—カンボジアで土器を作る人たちの暮らし—



南山大学 黒澤 浩

今回はじめて、ひたちなか市のふるさと考古学に参加させていただいた。お題は土器である。実は、学生の卒論などでは、土器は不人気なテーマである。その理由は、面倒くさそう、と言うことに尽きる。なにしろ遺跡を発掘すれば土器ばかりが何千、何万点と出土する。そんなにいっぱいあっても、卒論、書けないよ、と言うのが本音であろう。

しかし、普通にいっぱいあるからこそ、土器というのは、それを使っていた人々の生活を知るのうってつけの材料なのである。

そこで、今回は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターが所蔵する土器を使って、土器からどのようなことがわかるのかを、体験型のプログラムとして構成してみた。

また、もう一つ、午後の部では、今現在私が継

続調査しているカンボジア王国の土器作り村での生活を紹介し、それを通じて自分たちとは違う生活があることを知ってもらおう講座にすることにした。

さて、まずは午前のプログラムで使う土器を選ぶことから始めなければならない。埋文センターの稲田さんに協力してもらって、土師器甕を中心に数点選ぶ。ポイントは作り方がよくわかる土器。つまり、プログラムとしては、子どもたちに土器を観察・スケッチしてもらい、そこで気が付いたことを言葉で説明してもらおう。次に自分が気づき、考えたことの証拠が土器のどこにあるのか、再び観察してもらおうというものである。今回は時間に余裕があるので、土器の作り方と使い方をテーマにすることにした。

この方法は、観察↓推論↓検証というプロセスをとるもので、考古学者（に限らないが）が研究するときの思考プロセスと同じである。このとき大事なのは、子どもたちの気づきを否定しないこと。もちろん、間違った意見もあるし、観察に基づかない空想もある。しかし、再度の観察を通して、自分の意見が間違っていたことに気づく、そのプロセスが重要なのである。

学ぶということとは、あれこれ迷いながらも、自分にとってベストな結論にいたる道筋を見つけることだと思う。今回のプログラムもそれを目的として構成した。

さて、午後の部ではカンボジアの土器作り村の

様子を紹介した。カンボジアは言うまでもなく、一九七〇年代に、ポルポト時代という不幸な歴史を経験し、今なお多くの人が貧困の中にいる。土器を作っている人たちも、その多くは決して豊かではない。

子供たちには、カンボジアの土器作りを見て珍しいと思ってもらうだけでなく、彼ら／彼女らの生活がどうやったら良くなるのかについて意見を言ってもらった。遠い国のことを他人事として感じるのではなく、また逆に同情するのでもなく、まずは様々な暮らしがあることを知ってもらえたら、と思う。

さて、この講座を通じての私の目論見はどこまで成功しただろうか。その答えを知る楽しみは一〇年くらい先までとっておこう。



とのづか 殿塚古墳の線刻

稲田健一・梅田由子・三井 猛



レーザー測量風景

市内大成町に存在した殿塚古墳は、直径約35 mの円墳です。当古墳の特徴は、埋葬施設の横穴式石室の東側壁に線刻によって弓矢を入れる道具(靱)が描かれていることです。靱の描写は水戸市の吉田古墳と類似しており、虎塚古墳を考える上でも、重要な古墳となります。古墳は現在残っていませんが、線刻については水戸市の茨城高等学校に保管されています。今回は、保管されている線刻について、レーザー測量等の最新の計測方法で調査を行いました。

1 殿塚古墳について

殿塚古墳は、那珂川の支流の中丸川を望む台地縁辺部近くに位置し、殿塚古墳群中の一つである。殿塚古墳の南側には前方後円墳三基と円墳数基から成る大平古墳群が位置している。

殿塚古墳の発掘調査は、一九五九(昭和三四)年一月に茨城高等学校史学部の生徒たちが参加して行われている「大森・郡司一九六四」。

墳丘は、調査前の一九五五(昭和三〇)年頃に一部が破壊されていたが、南北約三五m、東西約三七mを測る円墳であることが報告されている。墳丘から埴輪の出土はない。埋葬施設は、凝灰質泥岩の板石を組み合わせた横穴式石室で、南に向かって開口し、半地下式である。規模は、玄室長三・六四m、玄室奥壁側幅一・六四m、玄門側幅一・三四mを測る。石室の高さは、石室が壊されているため不明だが、地表下に埋没した部分が一・一〇mあることが確認されている。奥壁は台形状で、両側壁も奥壁に沿って天井部側が内傾する。出土

遺物には、鉄製冑片、大刀一口、鉄鏃一本、馬具、勾玉一個、なつめ玉一個があったとされるが、現在確認する事は出来ない。

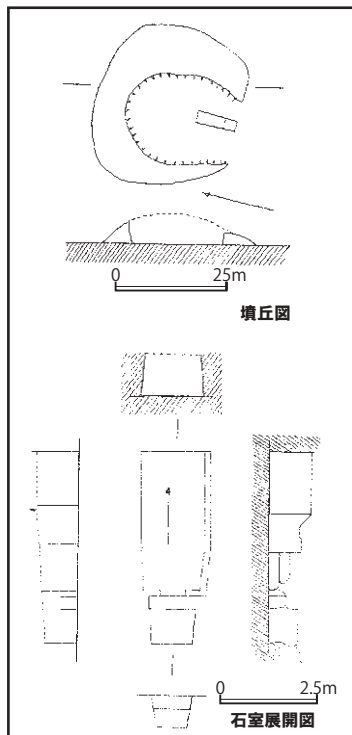


図2 殿塚古墳墳丘・石室
測量図 [大森・郡司 1964]



1: 殿塚古墳 2: 大平古墳群第1号墳 3: 大平古墳群黄金塚古墳
4: 大平古墳群第2号墳 5: 殿塚古墳群第1号墳

1945年撮影

図1 殿塚古墳と大平古墳群の位置

線刻は、調査前に破片化した石室の石材に確認され、その後復元されたものである。線刻の場所は、報告によると奥壁から一・五m手前の東側壁で、地表に接した部分にあったと推定されている。線刻は、先述のとおり復元され、茨城高等学校に保管されているが、拓本と簡易な実測図「大森一九六四」が公開されているのみで、その写真や詳細な図はない状況であった。そこで今回、茨城高等学校の許可をいただき、線刻について最新の計測技術による詳細な計測記録を行うこととした。

(稲田)

2 線刻壁画の実測

計測作業はできるだけ遺物に触れることを避けて記録するために非接触計測機器を使用し、線刻の情報をもれなく記録する計測を行った。

計測記録はまず線刻により描かれた図文が何を表しているか把握し、図文箇所 の壁面の状態も同時に記録する。そのために図文全体の計測記録を行い、次に線刻の幅や断面等の詳細を解析するための詳細な計測記録の二種類の調査を実施した。図文全体の計測記録はデジタルカメラを使用したSFM-MVSによる写真計測をおこない、より詳細な線刻の計測記録は三次元レーザースキャナを使用した。

使用したSFM-MVS写真測量ソフトウェアは Agisoft PhotoScan Professional[®] レーザースキャナは Next Engine 3D Scanner HD[®] である。

このレーザースキャナは三角法レーザースキャナであるため「O」法や位相差法に比べ高精度の計測結果が得られる。詳細測定は測定精度〇・一二七mmのマクロモードである。

また、線刻壁画は破断壁画を復元しているためオリジナル部分と復元部分を明確に分類する必要がある。目視による観察でも概ねオリジナル部分と復元箇所を分類することは可能であるが不明瞭な部分も多い。そのため近紫外線を使用したフォトルミネッセンスによる壁材の構成物質の簡易的な光学的分類も併せて行った。

なお、今回使用した光は近紫外線の中でも最も安全性の高い周波数UV-A帯(四〇〇nm～三二五nm)である。UV-A帯はUV-B帯に比べフォトルミネッセンスの反応は低いものの遺物への劣化作用が少なく、人に対しても安全性は高い光源である。

計測の成果

SFM-MVSによる写真計測



図4 殿塚古墳線刻壁画抽出画像



図3 殿塚古墳線刻壁画写真

を実施し、データ処理をおこなった結果、オルソフォトとDENM(数値標高モデル)を作成することができた。オルソフォトとは、正射投影写真ともいい、

遠近に関わらず同一の尺度で写されている画像のことをいう。また、DEM（数値標高モデル）とは、測定対象面を等間隔の正方形に区切り、各正方形の中心に標高値を持たせたデータであり、立体地図の作成などに利用される。この二つのデータをオープンソースのGIS（地理情報システム）ソフトであるQGIS（Quantum GIS）に取り込み、DEMから傾斜図と陰影図を作成し、重ね合わせることで壁画表面の凹凸を強調するデータを作成し、その上にオルソフォトを重ねてより線刻が認識しやすい画像を作成した（図4）。

また図4とフォトルミネセンス画像を比較することで、より明瞭に線刻のオリジナル部分と復元部分を分類することが可能となり、靱部分のオリジナル壁画の残存率は靱全体の四四パーセントであることが分かった。

次に、レーザースカナによる計測の結果、壁画の三次元モデルを取得することができた。三次元モデルから出力した点群データをCADソフトに取り込み、線刻壁画の立面図と断面図を作成した（図5）。

復元されている殿塚古墳線刻壁画の靱の大きさは矢部分を除いて縦幅約五八三mm、横幅約二六八mmである。しかし復元部分が多いためこの大きさは推定である。靱の輪郭は二重に描かれており、靱上部が左上から右斜め下方向にカーブを描いた形状をしている。矢筒の上部に

は格子状の図文が描かれており、その下部には第二横帯、第一横帯が描かれている。靱には四本の矢が盛られている。また靱とは別の図文と考えられるが、右上には方形の図文の中に複数の線刻が描かれている。

線刻断面図

は、線刻に対して直交した断面である。靱の二重の輪郭の線刻断面A、矢筒上部の格子状の線刻断面B1・B2、靱に盛られた矢の線刻断面C、靱の第二横帯の線刻断面D、第一横帯の線刻断面Eとした。

断面図を作成したすべての線刻の断面形状は幅が広く浅いU字の形状をしている。線刻B1〜Fの断面形状は、Aと比較するとより浅く、わずかな彫りこみであることが分かる。

線刻断面の幅と深さの計測結果を表に示した。靱の輪郭は目視でも他の線刻より太くはつきり

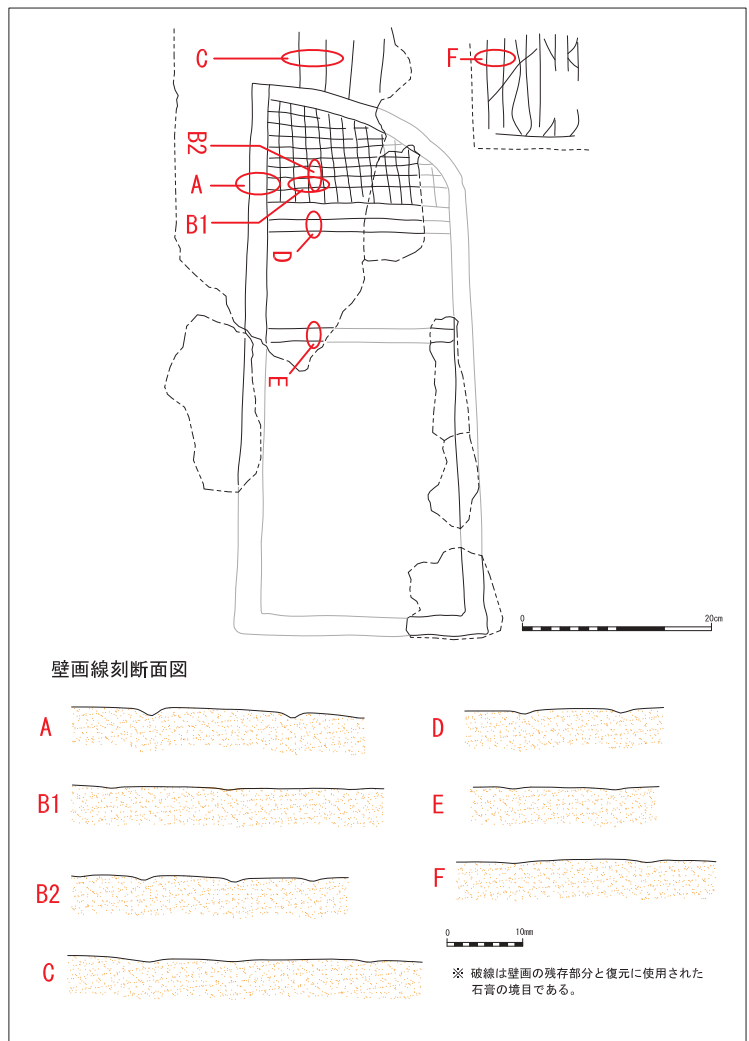


図5 殿塚古墳線刻壁画立面図および線刻断面図

表 線刻断面計測結果（線刻断面図より）

	幅 (mm)	深さ (mm)
線刻 A 左	4.20	0.98
線刻 A 右	3.42	0.71
線刻 B1 左	2.85	0.18
線刻 B1 中央	2.80	0.19
線刻 B1 右	2.71	0.16
線刻 B2 左	3.44	0.48
線刻 B2 中央	3.32	0.37
線刻 B2 右	3.30	0.57
線刻 C 左	6.48	0.42
線刻 C 右	3.18	0.23
線刻 D 左	3.44	0.48
線刻 D 右	3.30	0.23
線刻 E 左	3.57	0.22
線刻 E 右	3.74	0.22
線刻 F 左	4.04	0.17
線刻 F 右	4.64	0.32

していることが観察できたが、数理的比較の結果でも線刻Aの深さが最も大きいことが分かる。また、矢筒の格子部の線刻B1群とB2群の線刻断面の形状と計測結果を比較すると、縦線よりも横線の方が線刻の幅が大きく深いことが判明した。

吉田古墳線刻壁画との比較

殿塚古墳線刻壁画の図文や線刻を比較するのに有用な対象として水戸市元吉田町に遺存する国指定史跡吉田古墳の線刻壁画がある。二〇一〇年一〇月～二〇一一年一月に実施された史跡吉田古墳石室調査（第六次調査）で計測記録の成果（図6）（水戸市教育委員会提供）の点群データを使用して簡易的であるが数理的な比較をおこなった。

吉田古墳の線刻壁画の計測に使用した計測器は今回の殿塚古墳で詳細計測記録に使用したレーザースキヤナと同じNext Engine 3D Scanner HDである。

吉田古墳奥壁線刻壁画中央部の鞍の大きさは矢部分を除いて最大で縦幅約四九四mm、横幅約二五〇mmであり、鞍上部の形状は左上から右斜め方向に線刻が引かれている。また、線刻図文は矢筒輪郭線の上面と両側面内側にもう一重の線が描かれ二重線となり、矢筒上半分に二重の横帯と思われる四本の線と中央下部に一本の横線が描かれている。

線刻の断面a（図7）は鞍矢筒左側面の輪郭線（断面図線刻右側）とその内側（断面図線刻左側）の線刻（図6 a部分）である。輪郭線部の線刻断面の大きさは幅約三・九七mm、深さ約〇・七一mm、輪郭線内側の線刻は幅約四・四一mm、深さ約〇・七三mmで断面形状は緩やかなU字型または口縁の広い椀型の形状をしている（図7）。吉田古墳の線刻断面形状には他にも一部V字形を成すものもあるがこの緩やかU字型が平均的な断面形状と考えられる。

殿塚古墳線刻壁画の石材と吉田古墳線刻壁画の石材は粒子の細かい凝灰質泥岩と同質の石質であり線刻形状を比較するのに理想的な対象同士で、断面形状から工具痕としての考察もできる。今回の比較検討からは、線刻断面形状と幅と深さの比率の類似性と計測値の近似値から、双方の線刻作成に用いられたのは類似した工具面または突端を持つ形状をしている特定の用途の

ために作成された工具である可能性を示している。（三井・梅田）

参考文献

- 大森信英 一九六四「茨城県勝田市金上・谷津古墳」『日本考古学年報 12（昭和34年度）』日本考古学協会
- 大森信英・郡司良一 一九六四「勝田市金上所在古墳」『勝田市津田・西山古墳群調査報告』勝田市教育委員会
- 金田明大・木本肇周・川口武彦・佐々木淑美・三井猛 二〇一〇『文化財のための三次元計測』岩田書院
- 川崎純徳 一九八二『茨城の装飾古墳』新風土記社
- 栗林誠治 一九九三『古墳時代・鞍の分類と変遷』『真朱』第一号 徳島埋蔵文化財センター
- 米川暢敬 二〇一一『史跡吉田古墳石室調査（第六次調査）の概要』吉田古墳を考える 記録集』水戸市教育委員会

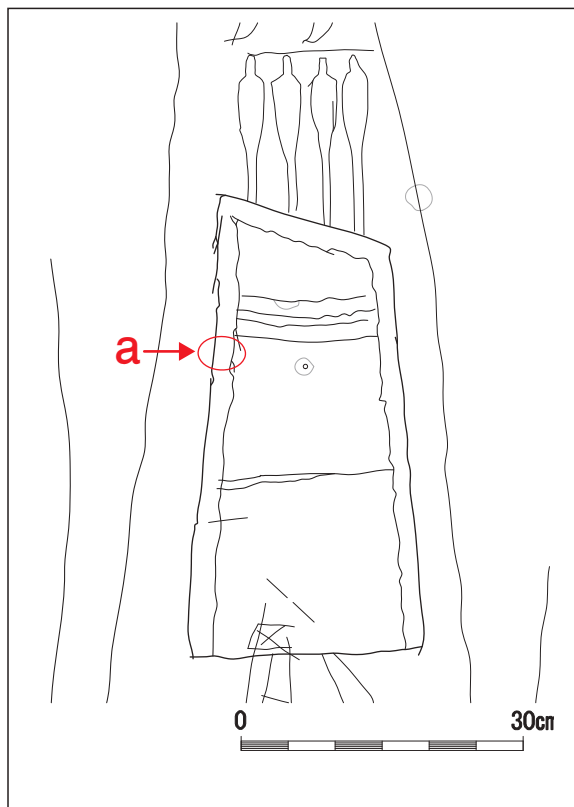


図6 吉田古墳線刻奥壁図文（水戸市教育委員会提供）

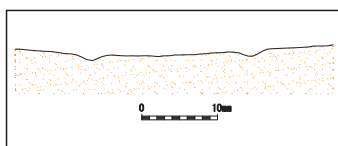


図7 吉田古墳奥壁線刻断面図（a）

* 調査・報告にあたり、茨城高等学校、水戸市教育委員会、秋田拓郎氏、小川貴行氏、関口慶久氏にご協力いただきました。

文 埋 センターの 日々 2018 前期

4月

- 一 虎塚古墳 一般公開 / 5 ひたちなか市役所 新人研修 / 5-8 虎塚古墳 一般公開 / 10-11 高野富士山遺跡 試掘調査 / 10-19 磯合古墳群遺跡 試掘調査 / 11-17 水戸市稲荷第一小学校へ資料貸出【井上資料縄文土器ほか】 / 17-24 浅井内遺跡試掘調査 / 26 私立久慈川三育小学校 5・6 年生社会科見学



- 5月
- 2 津田小学校 6 年生社会科見学



6 第15回企画展「虎塚古墳の時代」

- 終了 / 8 中根小学校 3 年生社会科見学 / 11-17 天王前遺跡試掘調査 / 遠原遺跡試掘調査 / 16 筑西市川島地区 女性学級見学 / 17 大子町上小川小学校 5・6 年生社会科見学



- 19 ワンケースミュージアム45「ひたちなか市の古墳を探るⅢー磯崎東古墳群2」開始 / 20 ときわ会 虎塚清掃 / 22 文化財愛護協会 議 / 22-25 岡田遺跡試掘調査 / 22-29 市毛上坪遺跡試掘調査 / 23 中根小学校 6 年生社会科見学 / 24 日立市金沢小学校へ資料貸出【井上資料縄文土器ほか】 / 25 那珂市菅谷西小学校 6 年生社会科見学 / 遺跡巡り / 30 ホットサロンいそぎ 見学 / 31 外野小学校 3 年生社会科見学



トイレの改修工事開始

6月

- 3 山形県山辺町郷土史研究会 見学 / 5-7 浅井内遺跡試掘調査 / 5-14 向野 A 遺跡試掘調査 / 7 田彦小学校 3 年生社会科見学 / 10 日立市金沢小学校より資料返却 / 12-19 黒袴遺跡試掘調査 / 16 ときわ会 虎塚清掃 / 18 トイレの改修工事終了 / 19 高野小学校 6 年生社会科見学 / 国家公務員初任者研修 / 19-26 峠遺跡試掘調査 / 21 茨城大学 出前授業「埋文センターの活動について」 / 26-27 市毛上坪遺跡 試掘調査 / 28 茨城大学 出前授業【虎塚古墳について】

- 7月
- 1 ワンケースミュージアム45 終了 / 4-13 反田遺跡本調査開始 / 5 枝川小学校へ資料貸出・返却【井上資料縄文土器】 / 10-19 市毛本郷坪遺跡 試掘調査 / 14 博物館実習施設見学【茨城キリスト教大学】 / 18 平磯小学校 6 年生社会科見学



今回ご紹介する花は、虎塚古墳の墳丘に群生するサツキ(臈月)です。サツキはツツシ科ツツシ属の植物です。五月ごろ、つまり臈月の時期に咲くことからこの名が付いたと言われています。



21 サツキ

虎塚古墳に群集するサツキは、古墳の後円部のみに植えてありますが、古墳を整備した当初からあったものではありません。実はこのサツキ、夏の猛暑から墳丘内の石室の温度を下げるために、日よけとして二〇〇一年から植えたものなのです。この日よけの効果は抜群で、石室内の温度は良好に保たれています。

ただ、このサツキ、昨年まで花がほとんど咲きませんでした。そして今年やっと咲きそろったので、ここで紹介することができました。「花の虎塚古墳」が来年もみられることを、今から楽しみにしています。(稲田健)



2018.5.17

18-19 西埴遺跡試掘調査 / 21 ふるさと考古学①「楽しい考古学」(講師・さかいひろこ氏) / ワンケースミュージアム46「底のそ

こー土器底面の圧痕」開始 / 22 ふるさと考古学②「土器の考古学1」(講師・黒澤浩氏) / 24-27 君ヶ台遺跡試掘調査 / 28 ふるさと考古学③「縄文探検」(講師・小山修三氏)

8月 一 亀井翼氏(上高津貝塚ふるさと歴史の広場)資料調査「三反田蛭塚貝塚縄文土器ほか」 / 5 ふるさと考古学④「石の考古学」(講師・鈴木素行)▶



10-11 原の寺遺跡試掘調査 / 19 ふるさと考古学⑤「土器の考古学2」(講師・さかいひろこ氏)▶



19 高橋千晶氏(奥州市埋蔵文化財センター)資料調査「武田遺跡群土器器費」 / 19-26 博物館実習(茨城キリスト教大学・国士舘大学・筑波大学)▶



21-28 市毛上坪遺跡試掘調査 / 21-30 市毛上坪遺跡試掘調査 / 22 NHK水戸「いばつチャオ取材」▶



ひたちなか市初任者研修 / 26 ふるさと考古学⑥「土器の考古学③」(講師・さかいひろこ氏) / 28-29 小美玉市立美野里中学校2年生職場体験 / 29 石田典子氏(群馬県立歴史博物館)資料調査「三反田蛭塚貝塚土偶」 / 31 岩宿博物館第66回企画展「石

槍」へ資料貸出「鷹ノ巣遺跡槍先形尖頭器ほか」 / 9月 6 三反田小学校5・6年生へ三反

田遺跡現場説明会 / 9 ワンケースミュージアム46終了 / ふるさと考古学「三反田遺跡発掘調査説明会」▶



二 酒井弘志氏(酒々井町教育委員会)資料調査「武田西埴遺跡旧石器」 / 11-28 堀口遺跡試掘調査 / 14 三反田遺跡本調査終了 / 19-20 天王前遺跡・三反田蛭塚遺跡試掘調査開始 / 20

みとしん湊経営研究会へ出張講座「湊の古墳」 / 26 市毛上坪遺跡本調査開始 / 29 ふるさと考古学⑦「遺跡の考古学」(講師・堀江武史氏)

入館者状況 (2018.4.1. ~ 2018.9.30.)

月	開館日数		個人		団体		計
	日数	(人)	(人)	(団体)	(人)	(人)	
4月	26	1169	2	(1)	57	(7)	1226
5月	26	213	10	(6)	530	(429)	743
6月	26	148	5	(2)	336	(288)	484
7月	26	153	5	(1)	191	(42)	344
8月	27	402	16	(0)	178	(0)	580
9月	26	236	2	(0)	46	(0)	282
合計	157	2321	40	(10)	1338	(766)	3659

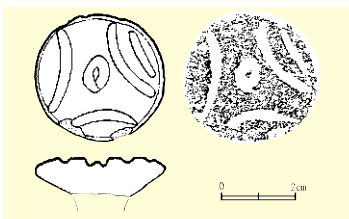
○内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『ひたちなか市報』及び下記のホームページでお知らせいたします。
<http://business4.plala.or.jp/h-lcs/>

編集後記の 笑う埴輪

「女子大生と装身具」シリーズ第八弾をお届けする。今回の土製耳飾りは、三反田蛭塚貝塚一九九〇年発掘調査の出土品で、報告書には掲載されないままになっていた。裏面の注記によれば、A-4グリッドの表土から出土した。表面の直径が34~35mm、残存する厚さが10mm、重さは12.8g。このシリーズは、未報告の資料を紹介する役割も果たしていた。

二〇一〇年の「道理山遺跡の玦状耳飾り」から毎年、博物館実習で訪れた大学生にモデルをお願いしてきた。道を踏み外した「女子大生と甚平」を含めれば、九名の実習生が表紙を飾った。この際だから、もう一人をここに掲載して区切りの良い一〇名にしておこう。モデルの方々には、不本意な写真を掲載して迷惑なだけだったかもしれない。広報誌を手にしてもらう誘惑に、モデルの魅力を借りる。これがシリーズの果たした役割の要であった。当初に設定した最終的な目標の実写版「乳飲み児を抱く埴輪」には辿り着けなかった。今回が最終回である。



ひたちなか埋文だより 第49号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2018年10月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市申根3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

表紙のモデルは益子南さん、裏表紙のモデルは打越美帆さんです。